

実態調査の結果や研修講座等のレポートなどから、小学校においては、児童のつまずきに気付いてはいるものの、授業において具体的な指導・支援の手立てが十分にできていないことが大きな課題であると言える。また、中学校においては、各教科担当者間でどのように情報を共有し、指導内容や指導方法を共通理解していくか、各教科の指導の中で、個に応じた指導をどのように進めていくかということが大きな課題であると言える。

そこで、アセスメントに基づいた児童生徒の指導・支援の実践例として、児童のつまずきの要因を踏まえた授業づくりと教師間の連携の工夫を行っているA小学校の取組、児童の「学び方」に配慮した授業の工夫を行っているB小学校の取組、数学科における生徒が理解しやすい授業の工夫を行っているC中学校の取組、教師間の生徒理解や共通理解の工夫を行っているD中学校の取組を紹介する。

1 児童のつまずきの要因を踏まえた授業づくりと教師間の連携の工夫（A小学校の取組）

(1) A小学校の課題と授業づくりの方針

A小学校では、「基礎・基本」定着度調査の結果等から、児童の各教科の基礎的・基本的な内容や家庭学習の習慣が十分身に付いていないと分析し、次の二点の課題に整理した。

【課題1】

担任が替わるたびに、学習に関する約束事も変わるため、児童が戸惑うことが多いのではないかと。そのため、学習のルールが確実に身に付かず、学習内容の理解も十分ではないのではないかと。

【課題2】

児童に対する教師のアセスメントは、つまずきの現象のみの把握に終わってしまい、つまずきの要因の把握まで至っていないのではないかと。そのため、児童の実態に応じた手立てを行うことができず、児童にとって「分かる授業」をすることができていないのではないかと。さらに、教師自身も自分の指導に自信がもてなくなっているのではないかと。

そこで、次のような方針を立て、授業づくりに取り組んだ。

【課題1に対して】

6年間を見通し、全ての児童が安心して活動できる学習環境づくりをする。

【課題2に対して】

児童一人一人のつまずきの要因から指導・支援の手立てを考えた授業づくりをする。

(2) 学習のきまりと授業づくりの留意点

ア 「授業のきまり10」による授業のきまりの共通理解

教師と児童が授業のきまりについて共通理解し、実践するために「授業のきまり10」を作成

した。そして、全校集会の場で、児童に対して教師の願いを伝えるとともに、児童に「授業のきまり10」を守るとどのような効果があるか考えさせることで、意識付けを図った。さらに、「授業のきまり10」を教室の側面に掲示することで、児童と教師が常にきまりを意識できるようにした（写真4）。

- 「授業のきまり10」**
- ① 休み時間に、次の時間の準備をすませておきましょう。
 - ② チャイムがなったら、席に着きましょう。
 - ③ 名前を呼ばれたら、必ず返事をしましょう。
 - ④ 机の右側に立って発表しましょう。
 - ⑤ みんなに聞こえる声の大きさを発表しましょう。
 - ⑥ 発表を聞くときは、発表する人の顔を見ましょう。
 - ⑦ めあては、赤で囲みましょう。
 - ⑧ まとめは、青で囲みましょう。
 - ⑨ 机の上の道具の置き方を守りましょう。
 - ⑩ 正しい姿勢をしましょう。



写真4 教室の側面掲示

イ 授業づくりの留意点の共通理解

教師が、1単位時間の授業の進め方について共通理解を図るために「授業づくりの留意点」を作成し、授業改善に取り組んだ（表7）。

表7 授業づくりの留意点

観 点	留 意 点
めあて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分かりやすく書く。 ・ 「まとめ」とのつながりを確実にする。
発 問	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゆっくり、はっきりと、言葉を精選して伝える。 ・ 一斉指導で伝わりにくい児童には個別に伝える。
指示・説明	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚的情報を提示する。 ・ ポイントやキーワードを文字化する。 ・ 肯定的な表現を使う。 ・ できるだけ簡潔にする。 ・ 生活と関連付けて説明する。 ・ 児童の「聞く」姿勢を徹底させる。
板 書	<ul style="list-style-type: none"> ・ ノートやワークシートの文字数に合わせて板書する。 ・ 板書の量を調整する。 ・ 文字の大きさや色に配慮する。 ・ 行や文字間の幅に配慮する。 ・ 小黒板や絵カードを補助的に使う。
見通し	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始まりと終わりの挨拶を徹底させる。 ・ タイマーを活用する。 ・ 授業の流れや現在の過程を示す視覚的情報を提示する。 ・ 授業の流れに配慮したワークシートを準備する。
注意・集中	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒板周りの掲示物や棚、教師の机、児童の机などを整理する。 ・ 机間指導をし、こまめな賞賛や承認をする。 ・ 言葉掛けやボディタッチ、アイコンタクトを活用する。
自己肯定感	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表や発言を受容する。 ・ 達成感で終わる授業にする。 ・ 全員で活動しているという実感を共有させる。 ・ 全員が終わられる課題数を合格基準にする。

(3) 指導・支援が必要な児童へのアセスメント

学習上のつまづきを示す児童の認知の特性等を把握するために、当教育センターの「アセスメントシート（平成22年度版）」を活用しながら、授業中の様子を丁寧に観察することにした。

「アセスメントシート」によるアセスメントの実際は、次のとおりである。

(5) 校内の教師間や中学校との連携

A小学校では、「個人記録簿（図20）」を作成して、アセスメントで明らかにした児童の苦手な領域やつまずきの要因と具体的な手立てについて、校内の教師間で共通理解し、連携を図りながら一貫した指導ができるようにした。また、実際に使用したヒントカードやワークシートなどの教材を教材室に保管し、全ての教師が自由に活用できるようにした。

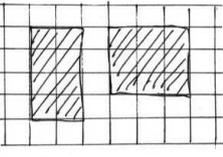
個人記録簿		名前 ()				
単元名	問題の内容	予想されるつまずき	具体的な支援	支援の場		経過
				いつ	誰が	
ひろさくらへ		広さの比べ方が分からない。	任意単位による比較の 1桁をワークシートで練習 したが、  下の線が見えなると 全分が分からない	授業中	担任	
			②マス目を書いた透明 シートを上から重ねさせて 線を見える化する。	い	い	難しい
				い	い	比較OK

図20 個人記録簿の記入例

さらに、算数は系統を重視することから、「算数チェック表（図21）」を作成し、「個人記録簿」と併せて中学校へ引き継ぐことで、小学校での指導・支援が継続されるようにした。

学年	No.	単元名	スモールステップ	氏名 ()													
				第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年			
				①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②		
3年	56	かけ算	乗法の分配法則														
	57		3口の乗法・結合法則														
	58		0や10の乗法														
	59	かけ算の ひっ算	(何百)・(何十)×1位数の														
	60		2位数×1位数・繰り上がりなし														
	61		2位数×1位数・繰り上がり1														
	62		2位数×1位数・繰り上がり2														
	63		3位数×1位数・繰り上がりなし														
64	3位数×1位数・繰り上がり1回																
65	3位数×1位数・繰り上がり2回																
66	3位数×1位数・繰り上がり3回																

各学年の単元ごとにチェックできるようにした。達成できたら○を付ける。

図21 算数チェック表

(6) 成果と課題

このように、児童のつまずきの要因から授業の改善を図るという、ボトムアップ型の授業づくりに取り組んだ。このことは、児童の心身の発達の段階と特性を十分把握した授業づくりであり、個を大切にされた教育への取組であると言える。教師間の共通理解を図ることで、児童だけではなく教師も安心して授業に取り組める環境ができたことが成果である。

現在、小学校から中学校への引継ぎにも取り組み、円滑な接続を図っているが、今後は、保護者との連携を更に密にし、家庭学習の充実にも取り組みたい。

2 児童の「学び方」に配慮した授業の工夫（B小学校の取組）

(1) B小学校の課題と授業づくりの方針

児童数64人、職員数15人の比較的小規模の小学校である。しかし、少人数であっても学習における理解に個人差が大きかったり、授業に集中できない児童がいたり、友達関係におけるトラブルなどの生活面での困難を感じている児童がいたりするなど、教育的ニーズに応じた支援を必要とする児童がいる。全国学力・学習状況調査等からも個人差が見られ、四則計算が定着していないことや読み書きが難しいことなどが分かり、各学級の一斉指導においても数人が学習内容の理解に困難さを感じているという実態が明らかになった。

このようなことから、次のように課題を整理した。

【課題1】

学習面や行動面の児童のつまずきの要因を把握し、一人一人の実態に応じた分かりやすい指導・支援を進めることが必要である。

【課題2】

児童の実態や特性を捉え、個々の教育的ニーズに応じた適切な指導・支援の方策について、学校全体で取り組んでいくことが必要である。

そこで、次のような方針を立て、授業づくりに取り組んだ。

【課題1に対して】

児童のつまずきの要因から指導・支援の手立てを考える。

【課題2に対して】

全ての児童が「分かる・活動できる」学習環境を準備する。

(2) つまずきの要因を踏まえた指導・支援の工夫の例

ア つまずきの理解のための「B小学校式アセスメントシート」の活用

B小学校では、児童の実態把握のために、授業場面や日頃の行動観察のほかに、教科や授業の内容等に関する意識調査や教科の学力に関する調査を実施している。さらに、一人一人の実態に応じた分かりやすい指導・支援を進めるために、学校独自のアセスメントシート（**図22**）を作成して、児童一人一人の学習面・行動面・対人関係などでのつまずきの主な要因を客観的に把握した。アセスメントシート作成の際は、当教育センター作成の「アセスメントシート（平成22年度版）」と文部科学省の「気付きのチェックリスト」の質問項目を参考とした。

また、意識調査や学力調査から一人一人の課題や得意なこと、興味・関心があることなどを詳しく分析・把握した。そして、その児童に合った適切な指導と必要な支援等の具体的な手立てを考えた。

このシートについては、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」、「計算する」、「推論する」、「器用さ」、「不注意・多動性・衝動性」の8領域、61項目からつまずきを把握した。全児童を対象にチェックして、どこにつまずきがあるかを把握できるツールとして活用した。

つまずきの項目が多かった児童については、個別に当教育センター作成の「アセスメントシート（平成22年度版）」や市販の書籍等を参考にしてつまずきの要因を探り、指導・支援の方向

性を決め、学習活動の具体的な指導・支援を検討した。

(評価 0：全くない 1：まれにある 2：時々ある 3：よくある)

領域	番号	つまずきの項目	観察場面	A	B	C	M
聞く	1	聞き間違いがある(「知った」を「行った」と聞き間違える)。	授業		1		
	2	個別に言われると聞き取れるが、集団場面では聞き取れない。			2		
	18	音読はできて言葉の意味や内容を理解していないことがある。	日常生活		1		
書く	19	板書を写すのが遅い。	授業	1	3		
	20	マス目の中に書けない。		1	3		
	43	跳び箱、ボール投げ等が苦手である。			3		0
※ 「つまずきの項目」はLDI-R(日本文化科学社)等の項目を参考にしました。			合計	5	20	0	0

(「不注意」「多動性-衝動性」) (評価 0：全くない 1：まれにある 2：時々ある 3：よくある)

1	学校での勉強で細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。	2	1	1	0	
2	手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする。	3	3	1	0	
18	他の人がしていることをささげたり、邪魔したりする。	1	3	0	0	
		合計	10	30	0	
つまずきの項目と「不注意」「多動性-衝動性」のチェック合計		合計	15	50	3	0

図22 B小学校式アセスメントシート

イ 個別の指導計画の作成

実態把握等から、手立てを講じることが必要な児童については、特別支援教育委員会(全職員参加)において、個別の指導計画(図23)の作成を決定した。そして、児童のつまずきの状態等に応じたきめ細かな指導が行えるように、教育的ニーズに対応した指導目標や指導内容・方法などを設定した。

目標設定は、ほぼ1年を区切りとした達成可能な「長期目標」やそれと関連付けた達成可能な毎学期の「短期目標」とした。さらに、目標達成のための支援・指導内容や手立てを具体的に記入し、評価を行った。

個別の指導計画については、学期ごとに改善・見直しを行った。

ウ 座席支援表の活用

アセスメントシート等からつまずきのある児童が、学習に集中して取り組めるように座席の位置を工夫した。その際、ペア学習やグループ学習での話し合い活動も意識して児童を配置し、「座席支援表」

個別の指導計画(例)

1 学校名及び支援期間等					
学校名	B小学校	児童氏名	〇〇〇〇	学年・組	〇年△組
支援期間	年 月～ 月	担任氏名	△△△△	作成者	△△ △
2 本人・保護者・担任の願い					
本人	保護者	担任			
・ 時間に合わせた生活ができるようになりたい。	・ 友達と仲良く生活してほしい。 ・ 時間内に家庭学習がで	・ 時間に合わせて生活してほしい。 ・ 友達と仲良く生活して			
3 目標					
長期目標(1年後)					
・ 授業中に話を聞き、スムーズに活動に取り掛かることができる。 ・ 時間を意識して生活することができる。 ・ 友達と仲良く遊ぶことができる。					
短期目標(学期ごと)					
1学期	2学期	3学期			
・ 声掛けを聞いて、1分前までに次の活動の準備をする。 ・ 友達との口論やけんかを少なくする。	・ 一人で1分前までに次の活動の準備をする。 ・ 友達との口論やけんかを少なくする。 ・ 2学期に学習する漢字を8割書く。	・ 一人で1分前までに次の活動の準備をする。 ・ 友達との口論やけんかを少なくする。 ・ 3学期に学習する漢字を8割書く。			
4 支援・指導内容、具体的手立て					
1学期	2学期	3学期			
・ 「準備の流れ図」を作成し、活用する。 ・ 宿題の漢字を50字に減らしたり、B4のプリントをB5で2枚にしたりしながら、負担感を減らす。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 毎学期達成可能な目標を立て、達成するために行う支援・指導内容や具体的手立てを計画する。また、毎学期ごとに本人の変容・評価を行い、改善・見直しを行うようにしている。 </div>				
5 本人の変容・評価					
1学期	2学期	3学期			
・ 声を掛けると次の活動の準備ができるようになった。 ・ 特定の友達との口論					
6 改善・見直し					
1学期	2学期	3学期			
・ 授業の流れについて見通しがもてるようになり、集中してきたので、漢字指導に力を入					

図23 個別の指導計画

(図24) を活用するようにした。座席支援表には、算数等の学習の時間だけでなく、全教育活動から支援を必要とする児童の実態に基づき、具体的な手立てが書かれているので、担任以外の教師が補教等でどの学級に入っても慌てることなく指導・支援することができた。

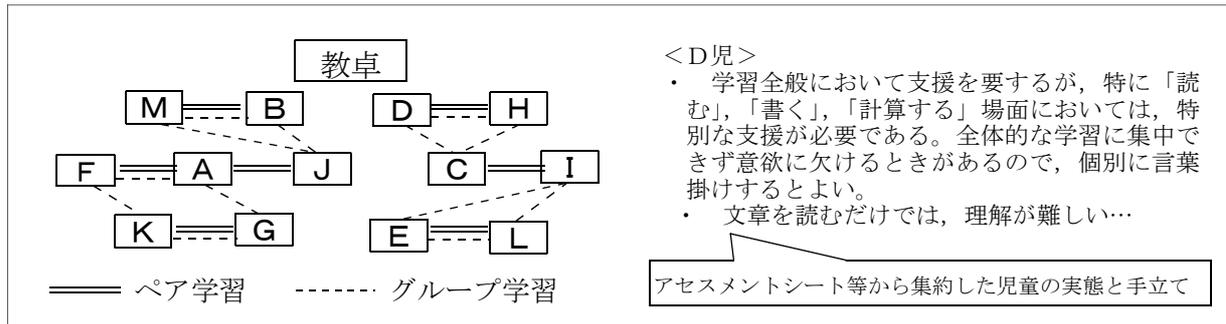


図24 座席支援表

エ ティーム・ティーチングによる授業

B小学校は、担任以外に特別支援教育支援員、専科、児童支援加配が配置されている。今年度から、更に個別の指導が充実するよう時間割を工夫し、それぞれの職員の空き時間を活用して算数科の学習をティーム・ティーチングで指導するように工夫した。

その際、アセスメントシートや個別の指導計画、座席支援表を基に、教師の動きや一人一人への指導・支援の方法について次のように工夫した。

(ア) T 1, T 2 の役割

T 1 (担任)	T 2 (専科・特別支援学級担任・特別支援教育支援員)
<ul style="list-style-type: none"> 授業を全体的に展開する。 時間配分の管理をする。 全体を動かすことに専念する。 全体の考えを把握する。 T 2 へ指示をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 個別の指導・支援を中心とする。 ヒントコーナーでの支援をする。 教材・教具などの提示の協力をする。 教材・教具開発、作成の協力をする。 児童の変容に応じて支援を少なくする。

(イ) T 1, T 2 の授業中の動き

- ・ 始め、終わりの挨拶は T 1, T 2 とも前で行う。
- ・ T 2 の基本の立ち位置は、学級の実態に応じた位置取りをする。
- ・ T 2 の声は、指導・支援している児童に聞こえる大きさにする。(T 1 の指示・発問・説明などの妨げとならないようにする。)
- ・ 児童への机間指導・支援は、左右どちらかの側面からが望ましい。顔の位置は、圧迫感を与えないようにするために、児童と同じ程度か、低い位置で行う。
- ・ 学級の実態や指導・支援の効果向上のために、T 1, T 2 の役割を過程ごとや場面ごとに入れ替えて行うなど、よりよい動きを選択・工夫する。

(3) 一人一人がよく分かる指導・支援の工夫

前述したように、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた指導・支援の工夫を行った。つまずきのある児童には「なくては困る」支援であり、どの児童にも「あると便利」な教材・教具などの支援を行い、学習に関する意欲や安心感をもたせるようにした。

ア 「授業のきまり 8」と「授業づくりのポイント 6」

児童が安心して、落ち着いて授業に臨むためには、ルールを明示し、それらを身に付けさせることが大

- 「授業のきまり 8」**
- 1 準備の時間に、次の学習の準備を済ませる。
 - 2 チャイムが鳴る 1 分前には、席に着いておく。
 - 3 机の上の道具の置き方を守る。
 - 4 正しい姿勢を守る。
 - 5 机の右側に立って、みんなの方を見て発表する。
 - 6 人の話は、目・耳・心を向けて聴く。
 - 7 ノートの文字は丁寧を書く。
 - 8 余計な声や音は立てない。

事である。B小学校では、特に、授業を「気持ちよくスタートする」ことや「相手を考えた学習」のための聴き方等を身に付けさせ、学ぶ意欲や児童同士の相互支援を促進しようと考え、「授業のきまり8」を設定した。

また、どの教師も1単位時間の授業づくりの中で共通理解・共通実践していく「授業づくりのポイント6」を設定し、教師も特別支援教育の視点に立った授業の心構えや授業づくりのポイントを明確にした。

イ 教室や授業中の机上の整理・整頓

教室を整理・整頓し、掲示物や整頓された物だけが視界に入るようにした。

教室前方の黒板周りは、授業に関係のある情報だけにするようにし、児童が授業に集中できるようにした。

また、授業に不必要なものを片付け、必要な物を置く場所を決め、使い終わったらその場所に置くようにした。さらに、授業中は、卒業生が在校生に残してくれた手作りのフェルトの鉛筆入れを利用した(写真7)。その結果、机上から鉛筆が落ちにくくなり、また、落ちてても音がしなくなるとともに机上が整理され、授業に集中しやすくなった。

ウ 板書の構造化

図25のように板書を構造化し、めあてやまとめを色の枠線で囲んだり、現在の学習場面を矢印で示したりすることで、見通しがもてるように工夫した。

- 「授業づくりのポイント6」**
- 1 教室の整理・整頓をする。
 - ・ 刺激の除去や大切な情報の明確化を図る。
 - 2 「授業のきまり8」を身に付けさせる(気持ちよいスタート・相手を考えた学習)。
 - 3 学習の見通しをもたせる工夫をする(安心感と意欲の向上)。
 - ・ 学習の進め方を一定にし、板書を構造化する。
 - ・ 活動の手順、時間、困ったときの対応や解決方法の見通しを小黒板等で示す(視覚支援)。
 - 4 教師の言葉掛けの工夫をする(安心感と分かりやすさ)。
 - ・ 指示・説明の簡潔化と具体化、写真や絵の利用、注意喚起後の説明等を行う(視覚・聴覚支援)。
 - ・ 教師のカウンセリングマインドと丁寧な言葉遣いをする(肯定的・受容的・共感的な接し方と賞賛)。
 - 5 一人一人がよく分かる授業にするための一斉指導における指導・支援(教材・教具等)を準備する。
 - ・ 導入の工夫、明確なめあての提示をする。
 - ・ 問題解決の場を工夫する(ペア学習等)。
 - ・ 学習内容の確実な定着を図る場を工夫する(個人差に応じたプリント等の準備)。
 - 6 個に応じた指導・支援を準備する(個別の支援)。
 - ・ TT指導や支援員との連携で机間指導や個別の賞賛・励ましを行う。
 - ・ つまづきを予想しての視覚的・聴覚的支援、操作的な教材・教具を準備する(ヒントカード等)。



写真7 授業中の鉛筆入れ

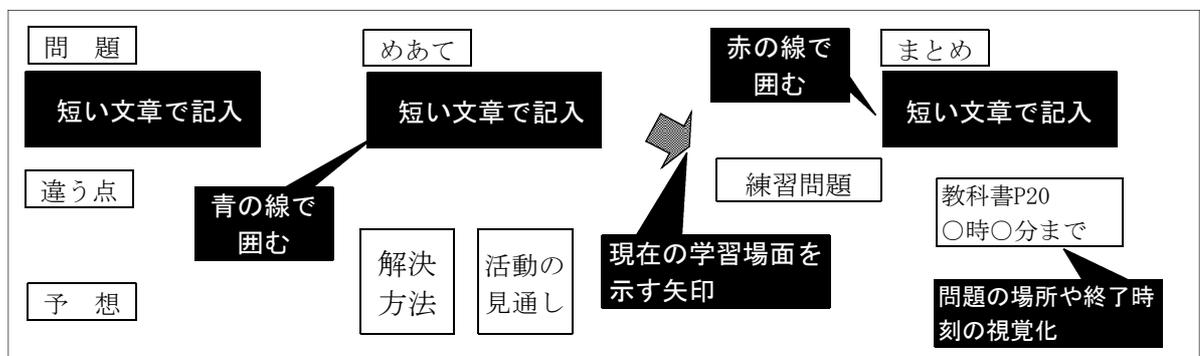


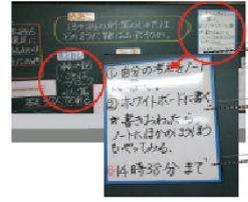
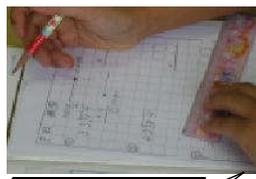
図25 板書の基本的な構造

(4) 指導の実際（小学校2年生算数科の授業実践）

<たし算のひっ算>

○ 本時の目標

- ・ 加法の場面を式に表し、繰り上がりのない2位数の加法の計算の仕方を考える。

つかむ	<p>1 フラッシュカードや小テストで前時までの学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への準備、意識をそろえる。 ・ 一人一人の児童の定着度を確認する。 ・ 意識や関心を高める。 	
見通す	<p>2 学習課題を把握し、本時のめあてをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行数を3, 4行に整理したり、色使いを変えたり、絵や図を提示したりして、視覚的に捉えやすくする。 ・ ノートに書き写すことが難しい児童には、書く場所を示す等の個別の支援を行う。 	
調べる	<p>3 解決方法や活動の見通しを立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 解決方法の見通し (何のために、何を利用して、何を導き出すのか) ・ 活動の見通し (いつまでに、何を、どれくらい) 	 <p>ヒントカードを使って一人で考えてみよう。</p>
調べる	<p>4 自分の考えをもち、友達と意見交換をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えをもたせるための支援を行う。 (ヒントカード、ヒントコーナー、操作物) ・ ペア・グループ学習で目指すこと (分かりやすい説明、発表への自信、相互理解、相互支援) 	 <p>説明を聞くと、やり方がよく分かった！違う考え方もあるんだ。</p> <p>私は、図を使って考えると、分かりやすかったです。</p>
深める	<p>5 全体場で考え方を伝え合い、考え方を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まとめに向けて、発表の場を意図的に設ける。 ・ 視覚・聴覚等への支援を行う。 (ホワイトボードの活用、操作物の活用、ICTの活用、教師による反復) 	 <p>違う考え方もあります。</p>
まとめる	<p>6 学習したことをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業中のポイントとなる言葉を使ってまとめる。 ・ 練習問題は、アセスメントに基づき、個別に準備する。 ・ コース別問題、ワークシート、個別指導を行う(実態に応じて、応用問題を準備したり、問題の量を調整したりする)。 	 <p>問題は違うけど、解き方は一緒だね。</p>  <p>応用問題にもチャレンジしてみよう！</p>
振り返る	<p>7 今日の学習をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りの観点を示した「振り返りカード」を活用する。 (分かったこと、がんばったこと、次に取り組みたいことについての自己評価) 	 <p>今日は、〇〇の仕方が分かった。 次の時間は、図を使わずに考えてみたい。</p>

(5) 成果と課題

このように、アセスメントに基づき、一人一人のよさやつまづきを把握し、全職員が共通理解することで、学び方の違いに応じた必要な指導・支援について工夫を行うことができた。

今後は、より具体的な指導・支援の手立てを検討し、家庭生活や社会生活に生かすことができるようにしていきたい。

3 数学科における生徒が理解しやすい授業の工夫（C中学校の取組）

(1) 現状と課題

対象の学級は、3年生35人である。この学級は明るく仲間意識が強く、何でも話しやすい雰囲気がある。数学では、計算などの表現・処理を中心とした基礎的内容については理解している生徒は多いが、数学的な見方や考え方を問う内容については理解が難しく、数学的な思考を必要とする応用問題に苦手意識をもつ生徒が多い。また、指示内容を正確に理解できず、指示どおりに行動できない生徒や授業中に注意散漫になる生徒もいる。C中学校の課題は、次のようにまとめられる。

【課題】 授業での学習状況や様子等から、気になる生徒はいるが、そのつまずきの状況や要因を的確に把握することができないために、授業など学校生活において、適切な指導・支援をすることが難しい。

そこで、次のような方針を立て、授業づくりに取り組んだ。

【課題に対して】 生徒のつまずきの要因を明らかにし、その特性に応じた指導・支援を取り入れた授業を展開する。

(2) アセスメントの工夫

授業において特別な教育的な支援が必要な生徒として、3人の生徒を挙げた。その根拠となったのは、当教育センターの「アセスメントシート（平成22年度版）」や標準学力検査、定期テストなどの結果と、授業中の表情や態度などである。アセスメントシートでは「計算する」、「推論する」の領域に重点を置き、生徒のつまずきの実態を把握し、一斉指導における指導・支援を検討することにした。対象生徒3人の実態は以下のとおりである。

【生徒の実態】

	生徒A	生徒B	生徒C
授業の様子 (数学)	学習態度は良好である。学習内容を理解できない場面が多い。教師や友人によく質問する。積極的に発表することもある。質問に対し、見当外れの返事をすることがある。	言葉の説明だけでは理解できないことが多く、学習内容を理解するのに時間を要する。教師や友人によく質問する。内容を筋道立てて話すことが苦手である。	学習内容を理解するのに時間を要する。授業中の質問は少ないが、昼休み等に質問に来るなど、積極的な面がみられる。言葉の説明だけでは理解できないことがある。
学力(数学)	負の数など、数の範囲を拡張した四則計算が難しく、その意味を考えることが難しい。		
注意・集中	集中力はあるが、持続することが難しい。		
興味・関心	学習内容によって意欲的に取り組む場合もある。	時折遠いところを眺めているようなときがある。	授業中は消極的である。
友達との関わり	仲のよい友人が数人いる。	友人が多い。人との交わりを大切にしている。	社交性はあるが、友人は多くはない。
授業の様子 (他教科)	国語が得意で自信をもち、質問や発表も積極的である。しかし、他教科はやや消極的である。	技能教科については積極的に参加している。他教科は学習内容を理解できないことが多い。	授業中の積極的な発言等は少ない。数学・国語が苦手である。積極的に活動するときとそうでないときの差が大きい。

(3) 指導の実際（中学校3年生数学科の授業実践）

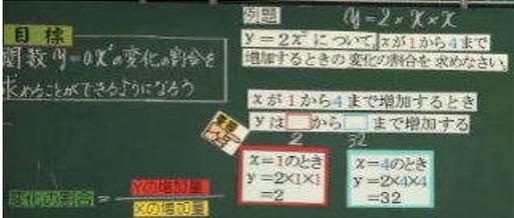
<関数 $y = a x^2$ >

○ 本時の目標

ア 関数 $y = a x^2$ の変化の割合の特徴を調べようとする。【関心・意欲・態度】

イ 関数 $y = a x^2$ の変化の割合を求めることができる。【表現・処理】

ウ 関数 $y = a x^2$ の変化の割合の意味と求め方を理解することができる。【知識・理解】

過程	主な学習活動	指導・支援 (※ ゴシック体は支援対象生徒を意識した手立て)
導入	1 計算ドリル（日々題）をする。 2 前時の学習を振り返る。〈前時の復習〉 3 本時の目標を確認する。 関数 $y = ax^2$ の変化の割合を求めることができるようになる。	○ 教師は10秒ごとに経過時間を伝え、全問解けた生徒には挙手させ、授業への意識を集中させる。  ○ 本時の目標を提示するとともに、 本時の学習の流れ を示し、見通しをもたせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 10:55～ 例題 1 11:05～ 課題 1・2 11:15～ 練習問題 11:30～ まとめ </div>
展開	5 例題 1 の解説を聞く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 〈例題 1〉 $y = 2x^2$ について、x が 1 から 4 まで増加するときの変化の割合を求めなさい。 </div>  6 課題 1 に取り組む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 〈課題 1〉 $y = 2x^2$ について、x が 2 から 4 まで増加するときの変化の割合を求めなさい。 </div> ※ 前半は一人で考え、後半は友達と考える。 7 課題 1 について発表する。 8 グループをつくり課題 2 に取り組む。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 〈課題 2〉 $y = \frac{1}{2}x^2$ について、x が次のように増加するときの変化の割合を求めなさい。 (1) 2 から 6 まで (2) -6 から -4 まで </div> ※ 必要に応じて相談しながら解く。 9 課題 2 の解説を聞く。 10 練習問題に取り組む。	○ まず一人で考える時間を確保し、支援が必要な生徒には個別に言葉掛けをする。 ○ 指名をするなどして、注意集中を促してから、教師がやってみせる。 ○ 文字カードやキーワード（変化の割合、 x の増加量、 y の増加量）を提示し、要点は黄色チョークを使い板書する。   ○ 変化の対応表を小黒板に記入し、解決方法を言葉で説明する。  ○ 課題 1 の時間配分を説明し、見通しをもたせる。 ○ 穴埋め式等のワークシートを準備し、生徒に選択させる。 ○ 机間指導を行い、生徒の様子を見ながら、理解できていない生徒に言葉を掛け、つまづきへの手掛かりを示す。  ○ 後半は離席も可能にし、生徒同士で教え合うペア活動をする。 ○ 対象生徒の座席近くに質問しやすい生徒を座らせる。 ○ グループを作り、必要に応じて相談しながら解くように指示する。 ○ 課題 2 の時間配分を説明し、見通しをもたせる。 ○ 比例定数が分数になっても同じ方法で解くことを課題 1 と比較しながら丁寧に解説する。 ○ 自分の理解度に合わせて、練習問題を選ぶよう指示する。 
終末	11 本時のまとめと次時の内容を確認する。 12 自己評価カードを記入する。	○ 本時のまとめと次時の予告をする。

(4) 一斉指導における具体的な指導・支援

指導・支援	内 容	＜授業での活用場面＞
学習環境の整備	教室前面（黒板周辺）の掲示物を厳選し、授業に関係のないものは他の場所に移動したり、棚にカーテンをしたりして、黒板の板書事項に注目できるように学習しやすい環境づくりに心掛けた。	＜導入 1＞
授業の流れの提示	集中力の持続が難しい生徒のために、学習の流れを表示し、学習活動の見通しをもたせるように工夫した。学習の流れを意識させるために、学習の内容を見て分かるように示した。	＜導入 4＞
ワークシート (課題 1・2)	ワークシートは、板書された学習課題解決の流れと同じように解答を導き出せるように課題を提示し、左半分を基本事項の穴埋め式、右半分を自由記述として、生徒に選択させる工夫をした。	＜展開 6, 8＞
練習問題	練習問題は、易しい問題から難しい問題へとレベルを少しずつ上げるスモールステップの内容で構成し、4段階8種類の課題を準備した。基本問題を理解することを生徒全員の目標と設定した。また、高校入試の問題も取り上げ、学習意欲を高める工夫をした。これらの練習問題は、枚数を制限せず、自分の理解度に合わせ自由に選択させる方法を試みた。	＜展開10＞
板書の構造化	目標は四角で囲み分かりやすく提示するとともに、重要な部分は矢印カードを置き、注目させた。また、例題、課題 1・2において、同じ解き方の手順で示した。	＜展開 5, 終末11＞
文字カード等	板書の重要事項や公式はカード化したり、色枠で囲んだりして、見て即座に判断できるように視覚的な配慮をした。大事な要点は小黒板に書き、常に生徒が確認ができるように黒板の近くに配置した。	＜展開 5＞
言葉掛け	説明をするときには、生徒が注目するように注意喚起を行い、具体的な言葉掛けや分かりやすい説明を心掛けた。「考える時間」・「聞く時間」・「書く時間」の活動を分けて指示し、集中して取り組めるようにした。	＜展開 5, 6, 8, 10＞

(5) 個に対する具体的な指導・支援

指導・支援	内 容	
座 席	授業での言葉掛けや生徒の実態を把握しやすいように、支援の必要な生徒を一番前の座席にした。また、対象生徒の後ろの席には、それぞれが話しやすく、分からないところを聞きやすくするために、数学の得意な生徒を配置し、ペア学習やグループ学習が取り組みやすい環境にした。	＜導入 1＞
ペア学習	生徒同士の活発な教え合い、学び合いができるように、離席も可能とした。	＜展開 6＞
グループ学習	生徒の集中力を持続させるために、個人活動やグループ活動を取り入れ、学習活動に変化をもたせた。グループ活動では、話し合いを重視し、学習内容が分からない生徒へは、お互いに協力して教え合い、学び合う活動を取り入れた。	＜展開 8＞
個別の指導	対象生徒を中心に、机間指導を行い、課題等でつまづいている内容に個別に対応できるようにした。	＜展開 5, 6, 8, 10＞

(6) 成果と課題

「アセスメントシート」を活用して、生徒の実態把握や指導・支援の方法を工夫した授業づくりに取り組み、生徒のつまづきの要因や学び方に応じた授業を展開することができた。生徒 A は、「以前より数学の学習が楽しくなってきた。」と話し、授業中の表情が明るくなってきた。また、特別な教育的ニーズのある生徒への指導・支援が、他の生徒の理解にも有効であった。

今後は、指導・支援の方法を学校全体で共有して取り組むことができるような校内体制づくりが課題である。

4 教師間の生徒理解や共通理解の工夫（D中学校の取組）

(1) 現状と課題

全校生徒数約770人、職員数約50人という大規模の中学校である。特別支援学級が2学級（知的障害及び自閉症・情緒障害）設置され、特別支援学級担任2人が特別支援教育コーディネーターとして指名されている。特別支援教育については、これまで、全職員を対象とした研修を毎年実施したり、校内委員会を定期的実施したりして、徐々に校内の体制づくりを進めてきている。

課題として、以下の点が挙げられる。

【課題1】

担任が、一人の生徒に関わる時間や場が限られており、生徒の学習面や生活面の特性やつまずきの状況などを、総合的に把握することが難しい。例えば、担任からは、ある生徒の困難さについて気付きが挙げられても、他の教科担当者と定期的に情報を共有する場がなく、一貫した指導・支援がなされにくい現状がある。

【課題2】

思春期に入った生徒の課題は複雑化し、これまでの失敗経験から自己肯定感が低くなりがちである。生徒自身に「分かる楽しさ」を感じさせ、自己肯定感を高めながら指導・支援を継続していくことが必要である。

そこで、年度当初、特別支援教育推進に当たっての次のような改善点を全職員で共通理解し、校内の支援体制の充実に取り組んだ。

① 授業を通して気付く。	・ 学校で独自に作成した共通チェックリストの項目を意識しながら授業を行う。
② 課題を生徒指導の問題としてだけ捉えない。	・ 問題の背景を、本人の性格や家庭の環境だけと捉えずに、発達障害（LD・ADHD・高機能自閉症）の可能性も考える。
③ 把握だけで終わらせない。	・ 授業の様子等を学年主任やコーディネーターなど複数の教師が観察し、支援策を一緒に考えたり、保護者との連携に支援スタッフも一緒に当たったりする。

(2) 校内の支援体制の工夫

ア 校内委員会の工夫

D中学校では、教科担任の指導が複数の学年にわたることも多い。そこで、支援の必要な生徒の共通理解を図るために、これまで関係する職員だけで構成していた校内委員会を、全職員が参加する方法に切り替えた（図26）。そのことで、情報の共有ができるだけでなく、全職員が特別支援教育

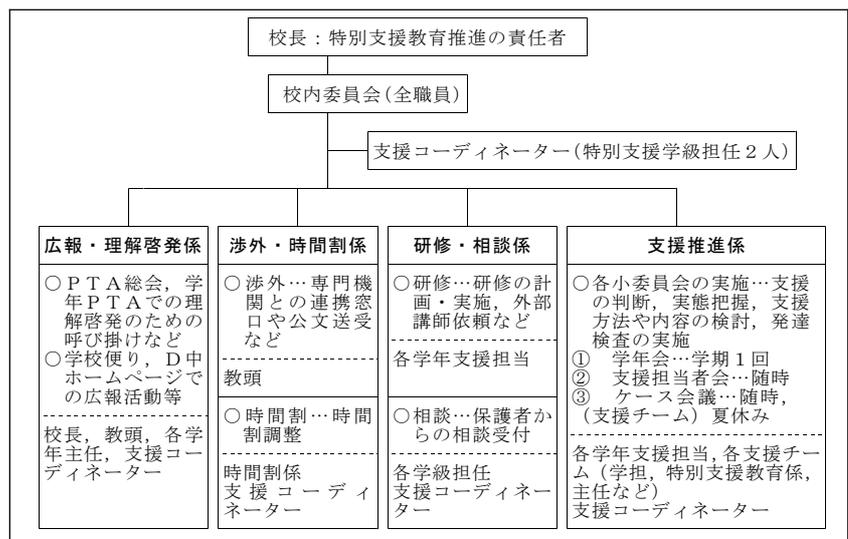


図26 D校における特別支援教育の推進組織

に関する情報に触れる機会が増え、特別な支援が必要な生徒への意識が高まってきた。

また、学年会での共通理解の会（学期1回）やケース会議（随時）なども実施し、校内の支援体制の機能化を図った。

イ 実態把握の工夫

(ア) 複数の教師による実態把握

まず、学校独自に作成した「共通のチェックシート」を、各教科担任が学習面で気になる生徒についてチェックし、コーディネーターがそれを集約した。

共通のチェックシート					
()年()組 氏名()					
項目	国語担当	社会担当	理科担当		合計
① 必要もないのによく席を立つ。					2
② 黒板の視写に時間がかかる。	✓	✓	✓		10
③ 非常によくしゃべる。					2
④ 他の生徒にちょっかいを出すことがとても多い。	✓				5
⑤ いつも教師の注意をひこうとする。					0
⑥ ボーットとしている場面が多く見られる。	✓	✓	✓		10
⑦ ノートをほとんど書いていない。	✓	✓	✓		9
⑧ 注意を持続して、課題に取り組むことが難しい。	✓				4
⑨ 同じ質問を繰り返すことが多い。					2
⑩ 質問に対して的外れの答えをすることが多い。	✓				5
⑭ 漢字の使用が少なく、平仮名を多用する。		✓	✓		6
⑮ 席に座っていても落ち着きのない行動(絶えず体を動かす、椅子をがたがたさせるなど)が目立つ。					2
合計	26	12	11		183

複数の教科担任のチェックがあった生徒について、これまでの学校生活の様子や保護者への働き掛けなどをまとめた。そして、支援が必要と思われる生徒については、夏季休業中に担任や学年主任らとのケース会議や保護者との相談を実施し、指導・支援の段階を明確にした。これらの情報は、全職員による校内委員会で共通理解して進めた。

平成23年度 支援対象生徒について							
学年	クラス	氏名	主な困難さ	ケース会議参加者	保護者との教育相談	今後の取組	
1	○	A	学習面	担任 学年主任 コーディネーター	○月○月に実施 個別の指導を希望	これまでの様子、学校生活、評価、テスト結果、ノート、日記、作品、提出物、保護者への働き掛けなど ・小2のときにADHDと診断される。 ・授業中、学習に集中できないことが多い。 ・絵を描くことが好き。 ・提出物は遅れがち。 ・友達との関係は良好。	週3時間 個別の指導実施。
1	○	B	学習面	担任 コーディネーター	電話連絡 今後、発達検査の実施希望	・進路：○○高等学校進学希望 ・提出物を出さない。 ・文字が乱雑である。 ・発表はできる。 ・コミュニケーション良好。 ・教科連絡もしっかりできる。	一斉指導 の中で配慮指導。

(イ) 保護者へのアンケート

家庭訪問時に、各担任から全生徒の保護者にアンケートを配布した。アンケートを基に保護者と担任が話し合うことにより、これまで把握していなかった生徒に関する情報や保護者の不安な思いなどが具体的に寄せられた。それらは、指導・支援の方策を検討する際の重要な情報となった。

保護者の皆様へ

○○市立D中学校
校長 ○○○○

生徒の支援についてのアンケート
()年()組 名前()

本校では、**学習面や行動面、コミュニケーションの面で困っている子ども**に適した学習や支援を行うための個別支援という体制があります。気軽に御相談ください。

<個別支援による効果例>

- 進路に関心をもち、やる気が出て、学習に積極的に取り組むようになった。
- これまで授業中に質問できなかったことを個別に質問して、分かるようになった。
- コミュニケーションをとることが、苦手でいらいらしやすかったが、ソーシャルスキルトレーニングなどによりいらいらが減り、行動が落ち着くようになった。

① 保護者から子どもを見て、学習面や行動面、コミュニケーションの面で困っていることはありませんか。

② そのことで、専門機関等に相談に行かれたことはありますか。

③ 子どものことで気になることがありましたら、お書きください。

(ウ) 小学校からの引継ぎ

できるだけ早期に、支援が必要な生徒について把握するため、本年度より本校独自の引継書を作成し、該当する小学校に入学前までに記入を依頼した。

平成23年 () 月 () 日 作成				
平成23年度入学生 特別な支援や配慮を必要とする児童について () 小 → D中へ引継ぎ書				
※ これまでの小学校での取組が分かるようにお願いします。 6年担任 () () 組 児童名 ()				
学習面での課題	行動面での課題	支援内容・方法	保護者への働きかけと理解度	相談歴(専門機関含む)
国語・算数等の学習状況(何年生程度の内容、できる部分とできない部分、文字やノートの記録の仕方、作品、提出状況、授業中の態度等)を教えてください。	対人関係、情緒の安定、言語、歩行、身辺処理、個性的な行動等について教えてください。	その児童に応じた配慮の仕方、支援の方法や内容等を教えてください。	何年生の時から、どのような話を保護者にしてきたのか。また、保護者の特別支援教育に関する期待度など。(入級指導をしてきたか、特別な配慮や支援に)	スクールカウンセラー、病院、療育期間、こども総合療育センター(旧児童総合相談センター)等への相談歴を教えてください。
【知能検査結果】(検査名)(実施日)(IQ)等		中学校へ引き継ぐに当たって、現時点での小学校の本児童に対する考え		

(3) 指導事例

ここでは、「アセスメントシート(平成22年度版)」を活用して、学習上のつまずきの要因を見立て、適切な手立てを検討していった生徒Aへの取組を紹介する。

ア 対象児 生徒A(2年)

生徒Aは、学習中注意を持続することが難しく、教師の個別の言葉掛けがなければ、説明を聞いていなかったり、好きな絵を描いていたたりすることの多い生徒である。体育や技術・家庭など、実技の多い教科では意欲的に活動する姿が見られ、教科によって意欲に差があった。「共通のチェックシート」から、複数の教科担任から支援が必要な生徒として挙げられた生徒であった。家庭訪問時に、保護者から個別の支援を望む声が担任に寄せられ、生徒A自身も「もっと分かるようになりたい」という希望があることが分かり、校内の支援体制の工夫の中で、週6時間の個別指導の時間を設定することになった。

イ アセスメントシートの活用

(ア) つまずきの項目のチェック

担任と教科担任が連携して各項目をチェックした。

(イ) 苦手な領域の見立て(図27)

○ 「推論すること」は、特に苦手な領域と思われる。

○ 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」、「計算すること」は、全般的に苦手であり、支援が必要である。

(ウ) つまずきの主な要因の見立て(図28)

○ 「注意」、「記憶」、「言語理解」、「実行機能」につまずきの背景があると思われる。

○ 注意が集中すれば、「聴覚的入力」や「視覚的入力」は良好で、「視覚・空間認知」は得意だと思われる。

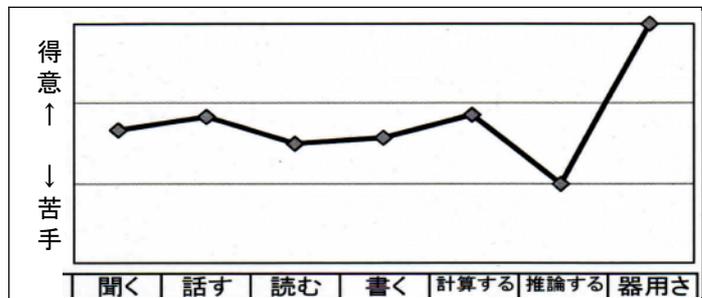


図27 生徒Aの苦手な領域の見立て

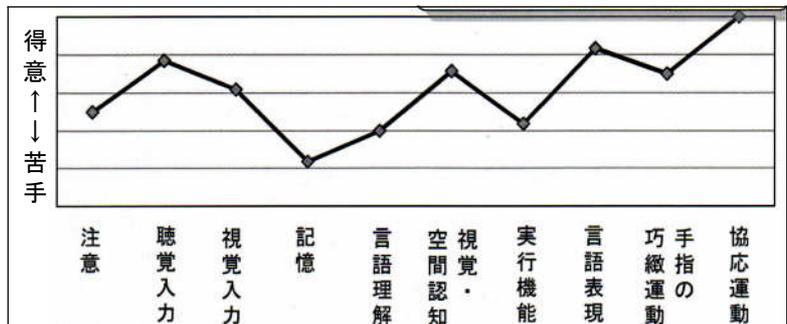


図28 生徒Aのつまずきの主な要因の見立て

(エ) つまずきの主な要因を考慮した手立て

表8は、つまずきの主な要因の見立てから、個別の指導場面と一斉指導の場面で考えられた具体的な手立てである。担任、教科担任、特別支援教育コーディネーターらが、ケース会議を実施し、これらの手立てを検討し、共通理解を図った。

表8 生徒Aへの具体的な手立て

主となる要因	具体的な手立て	個別の指導	一斉指導
注意	<ul style="list-style-type: none"> 注意を喚起する言葉掛けを個別にする。 座席位置を配慮する。 	○	○
記憶	<ul style="list-style-type: none"> 理解に合わせて課題の量を調整する。 図や絵などを取り入れた説明をする。 	○	○
言語理解	<ul style="list-style-type: none"> 多感覚を活用した働き掛けをする。 (音読, 復唱, 動作化, 操作活動など) 	○	○
実行機能	<ul style="list-style-type: none"> できたことを認める言葉掛けを多くする。 自分で選択して決定する場面を設定する。 自分で学習過程を振り返るような場面を設定する。 	○	○

(オ) つまずきの要因を踏まえた指導・支援例

ここでは、英語の個別の指導場面での指導・支援例を紹介する。

a できたことを認める言葉掛けを多くする。(主に「実行機能」への手立て)

「会話する」、「読む」、「書く」などいろいろな活動の中で、生徒Aができたことを認め、自信をもたせるようにした。そうすることで、質問に大きな声で答えたり、「○○が難しい」と自分から話したりする様子が見られるようになった。

b 注意を喚起し、学習への集中力を高める。(主に「注意」への手立て)

学習活動の導入時に、「単語探しゲーム」(図29)など、楽しく参加できるような活動を設定した。ゲームには、生徒Aが既に獲得している単語と間違いやすい単語の両方を取り入れ、楽しく活動する中で、英単語に慣れ親しむことができるようにした。このような活動を導入時に、時間を区切って行うことで、授業への気持ちの切り替えができ、集中して学習に取り組むことができた。

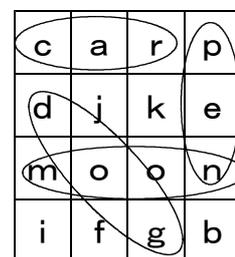


図29 単語探しゲーム

c 多感覚に働き掛ける。(主に「記憶」への手立て)

英単語を学習する際には、文字カード(c a r)を見ながら、教師の発音([k a :])を聞く、自分で発音する、「車」という単語の意味を知るなど、文字と音、意味を結び付け、多感覚を活用して学べるようにした。

d 振り返り(主に「実行機能」への手立て)

終末では、「今日のポイント3」として、本時で分かったことを3点、自分の言葉で発表する時間を設定した。その中で、もう一度学習したい内容やもっと知りたい内容などを生徒Aから引き出し、具体的な次の学習計画を一緒に立てるようにした。

(4) 成果と課題

生徒の学習や生活上の困難さを教師がお互いに共通理解して指導・支援を進めるために、学校独自の「チェックリスト」や「アセスメントシート」などを活用して、校内委員会やケース会議で検討し、取組を始めた成果として、教師が、共通の認識をもって生徒を理解することができるようになってきた。

今後、このような取組を進める中で、生徒の変化や指導の効果について更に検討し、それぞれの指導の在り方を見直していくことが必要である。